

<原著>

## 大学生における抑うつ傾向と自我状態との関連について

片山あゆみ・松原萌・柴原直樹

### Relationship between Depressive Tendency and Ego States in University Students

Ayumi KATAYAMA, Megu MATSUBARA and Naoki SHIBAHARA

The purpose of this research was to examine relationships between depressive tendency and ego states in university students. In total, 131 students (77male and 54 female) participated in the research, where depressive tendency and ego state were measured by the Beck Depressive Inventory and the TEG-II, respectively. The results showed that the depressive tendency was positively correlated with AC (adapted child) and negatively correlated with CP (critical parent) and FC (free child), and that higher AC and lower FC predicted the tendency to depression.

**Key words** : depressive tendency, ego states, university students

抑うつ傾向、自我状態、大学生

#### はじめに

文部科学省の平成25年度学校基本調査速報によると、4年生大学への進学率（現役）は47.4%となっており、これは、ほぼ高校生の2人に1人が4年生大学へ進学していることを示している。このような進学率の上昇と相まって、少子化および大学の大衆化による実質大学全入時代に突入しつつある現在、大学新入生の学力低下、大学生活への不適応、明確な目的もなく入学してくる学生の増加といった問題が新たに浮上してきた（香川、2005<sup>1)</sup>）。同時に、大学生の退学や休学、あるいは留年などの割合が増加傾向にあり、その背景に抑うつやスチューデント・アパシー

といった精神的な疾患の存在が指摘されるに至って（鉄島、1993<sup>2)</sup>；笠原、2002<sup>3)</sup>）、大学教育は新しい局面を迎えることとなった（広沢、2007<sup>4)</sup>）。

このような状況の中、福祉系の大学において福祉の専門家を目指す学生に「こころの福祉」を教授するための質の高い教育方法の提示が求められるようになった（近畿医療福祉大学編、2012<sup>5)</sup> 参照）。「こころの福祉」を実践するためには、対人関係は極めて重要であり、コミュニケーション能力や相手を理解し、相手の立場で物事を考える習慣を身につけることの必要性や、そのための現場実習は教育カリキュラムの中でも益々重要な位置を占めるようになってきている。

学生自身も「こころの福祉」を実践する

ために必要な知識や技術を学び、人間関係の中で人として大きく成長し、大学生活を有意義に送ることが望まれるが、自己を形成する上で様々な葛藤や不安に出会うことも予想される。特に、抑うつ傾向は大学生の学業面あるいは対人関係での困難さや中途退学と関連があると言われ (Hysenbegasi, Hass, & Rowland, 2005<sup>6)</sup>; Fabiano, Stark, & Lindsey, 2009<sup>7)</sup>)、大学における福祉教育を充実させるために、学生の心理的特徴をより深く理解すると共に、学生個人の心身の健康管理能力を高めるように指導していくことも重要課題として取り上げられるようになった。そのためには、現時点での学生達の抑うつ傾向について理解し、彼らのどのような性格特性が抑うつ傾向に影響を及ぼしているのかを検討することも必要となってきた。この点を明らかにすることが本研究の目的である。

### 抑うつ傾向

抑うつとは、気分が沈み（憂うつ）、これまで楽しく興味をもって取り組んでいたことがどうでもよくなり（興味や喜びの喪失）、やる気が失せ元気がなくなる（気力・活力の減退）といった、憂うつ感、喪失感、絶望感などを伴う程の深刻な状態が持続する症状を言う (堀野・森, 1991<sup>8)</sup>; 佐々木, 2012<sup>9)</sup> 参照)。

一般に、抑うつ性の高い人は不安や攻撃性が高い傾向にある (保野・島田・宮田, 1995<sup>10)</sup>; 佐藤・安田・児玉, 2001<sup>11)</sup>) が、自己効力感は低い傾向にある (佐々木・小山, 2004<sup>12)</sup>) と言われている。また、抑うつ的な人の特徴として、全生活領域から退却をする

こと (笠原, 2002<sup>3)</sup>)、*「私には魅力がない」*、*「私は不適格者だ」*といったように自己評価が非常に否定的であること (Beck, 1976<sup>13)</sup>)、他人が眉をひそめているのを見て、自分が嫌われていると判断するといったように、対人関係場面での出来事を、自己に関連づけて推論しがちであること (金子・本城・高村, 2003<sup>14)</sup>) なども挙げられている。

ところで、厚生労働省が3年に1回行っている「患者調査」によると、気分障害の通院患者数は平成8年から20年にかけて増加傾向にあり、23年でやや減少しているものの依然として高い水準を保っていることが示されている (表1 参照)。気分障害のほとんどが「うつ病」であり、軽症の抑うつ状態はさらに高い頻度で発生することなどを考慮すると、大学生における抑うつ傾向は決して低くはなく、その対策は彼らの精神的健康を考える上で決して見過ごすことのできない最重要課題であるとの指摘もある (三野, 2010<sup>15)</sup>)。

大学生になるとこれまでとは違った環境の中で生活しなければならず、責任感が強く理想を追求し過ぎたり、自分を自由に表現できず消極的過ぎたりすると大学生生活にうまく適応できず、対人関係にも問題が生ずる可能性がある。これが原因となって日常生活全般における無気力感や自己否定感といった抑うつ傾向が現れることも考えられる。そこで、本研究において、大学生における抑うつ傾向を自我状態のアンバランスという観点から検証することで、大学生の精神的健康を促進するための資料を提供できるのではないかと考え調査研究を行った。

表1. 厚生労働省 平成23年患者調査の概況 (千人)

疾病大分類	8年	11年	14年	17年	20年	23年
気分〔感情〕障害 (躁うつ病を含む)	38.0	38.6	64.9	77.0	80.1	74.5

## 方 法

**対象者** 福祉系 K 大学の大学生を対象とした。調査参加者は男性89名、女性67名の計156名、平均年齢は男性19.8歳、女性19.7歳であった。

**調査時期と調査方法** 授業時間を利用し、2013年4月から5月に掛けて実施した。調査対象者に抑うつ傾向および自我状態に関するアンケート用紙を配布した後、記入方法を説明し、各項目について回答を求めた。アンケート用紙は、調査終了後にその場で回収した。

**調査用紙** ベック抑うつ尺度 (BDI; Beck Depression Inventory) の日本語版 (林, 1988<sup>16)</sup>) を利用して抑うつ傾向を測定した。これは、調査日を含めた過去1週間における抑うつ状態の重症度を測定するもので、21の主要な抑うつ症状を示す項目から構成されている。各項目には4つの文章があり、被検者はその中から自身の気持ちを最もよく表している文章を選んで○をする (ただし、複数選択しても可)。抑うつ反応得点は、選択した文章に対応する得点 (0～3点) を加算したもので表される (21項目の総合得点は0～63

点の範囲で分布し、得点が高いほど重症度が高いことを示す)。ただし、複数の文章を選択した場合、抑うつへの過大評価を防ぐという目的で点数の低い方を採択した。

また、自我状態に関しては、東大式エゴグラム－新版 TEG II (2006)<sup>17)</sup> を利用し測定した。このスケールにおいて、自我状態は①親の自我状態 (P)、②大人の自我状態 (A)、③子どもの自我状態 (C) に区分される。さらに P は父親的な役割を担う批判的な自我状態 (CP) と母親的な役割を担う養育的な自我状態 (NP) に、C はもって生まれた自然な姿である自由な子ども (FC) と親の影響を受けた順応した子ども (AC) の自我状態に分けられる。質問項目は L 尺度3項目を加えた53項目から成っている。これらの質問項目に対し、「はい」「どちらでもない」「いいえ」の3件法による回答を求め、それぞれの回答に対して、2点、1点、0点を割り当て得点化した。

## 結 果

東大式エゴグラムにおける L 尺度で得点が3以上の16名 (男女とも各8名) を分析の対象から除外した。その結果、男性81名女性

表2. 5つの自我状態と一般的特徴

自我状態	一般的特徴
CP	責任感が強い 厳格である 批判的である 理想をかかげる 完全主義
NP	思いやりがある 世話好き やさしい 受容的である 同情しやすい
A	現実的である 事実を重視する 沉着冷静である 効率的に行動する 客観性を重んじる
FC	自由奔放である 感情をストレートに表現する 明朗快活である 創造的である 活動的である
AC	人の評価を気にする 他者を優先する 遠慮がちである 自己主張が少ない よい子としてふるまう

表3. 5つの自我状態の平均値 (SD)

	CP	NP	A	FC	AC
男性	10.7 (4.37)	13.0 (4.65)	11.3 (4.04)	11.2 (4.50)	12.8 (4.70)
女性	10.5 (4.62)	11.4 (4.09)	10.1 (4.29)	10.6 (4.68)	14.2 (4.72)

表 4. 日本人大学生 (2013) における 5 つの自我状態の相関

	CP	NP	A	FC	AC
CP	1.00	.519**	.554**	.514**	-.311**
NP		1.00	.403**	.454**	-.088
A			1.00	.272**	-.045
FC				1.00	-.199*
AC					1.00

\*\* $p < .01$  \* $p < .05$

59名の計140名がデータ分析の対象となった。

両者の間に有意差はないが、女性の方が高い傾向がみられた ( $t_{138} = 1.871, p = .063$ )。項目別にみると、「自己嫌悪」「自己批難」「い

### 抑うつ尺度

抑うつ尺度21項目の合計平均得点は男性14.09(SD=11.40)、女性17.59(SD=10.30)で

らだち易さ」「活動困難」において女性の方が男性に比べて有意に高かった（それぞれ、

表 5. エゴグラム・パターンの分類と特徴

TEG パターン	タイプ	特 徴
1. CP 優位型	権威主義	責任感が強く、理想を追求し自他ともに厳しい。
2. NP 優位型	世話やき	人に優しく、相手の気持ちを理解し面倒見がよい。
3. A 優位型	論理的	知的で有能であるが、理屈っぽく冷たい面がある。
4. FC 優位型	自由奔放	好奇心旺盛でネアカの人。ただし、周囲への気遣いが少ない。
5. AC 優位型	依存者	「No」と言えない性格で、自ら考え先頭に立って行動するのが苦手。
6. CP 低位型	ルーズ	控えめで、自他ともに甘く、細かいことに拘らない。
7. NP 低位型	癪癪もち	人に対して厳しく攻撃的で、思いやりのない。
8. A 低位型	現実無視	あまり論理的、知性的でなく現実認識ができていない。
9. FC 低位型	ネクラ	自由にはしゃいで楽しむことができず、頑固で厳格な性格。
10. AC 低位型	ワンマン	指導力があるが自分の思う通りに行動し、他人に盲従を強制。
11. 台形型 I	マイフォーム主義	知的で周囲への配慮もでき自他肯定的。特に身内に甘い。
台形型 II	ボランティア	自己犠牲的で他人を助けることに喜びを感じる。
台形型 III	自己中心的	人に対する思いやりに欠け、自分が楽しければよいという性格。
12. U 型 I	自己否定的	義務感や責任感が高いが、十分に自己主張できない。
U 型 II	衝動的	イライラを我慢するが、ちょっとしたことがきっかけで爆発する。
U 型 III	いじけ	周囲への不満を持ちつつも一生懸命尽くす。
13. N 型 I	お人好し	頼まれた事や命令された事を無批判に引き受ける。
N 型 II	殉教者	能率よく仕事をこなすも楽しむことなく、我慢して滅私奉公。
N 型 III	ワーカホリック	献身的に働き、不満を言わず指図に従うイエスマン。
14. 逆 N 型 I	頑固な警官	社会規範や規則を厳守するが、優しさや思いやりに欠ける。
逆 N 型 II	プレイボーイ	他人に厳しく自分に甘く、思いやりに欠ける。
逆 N 型 III	気分屋	感情に振り回され現実認識が低く、失敗すると他人のせいにする。
15. M 型	親分肌	人に優しく面倒見が良いと同時に、陽気で面白い人。
16. W 型	自己破壊的	批判精神が強く怒りっぽい、それが自分に向けられ自虐的になる。
17. 平坦型 I	スーパーマン	意欲的かつ活動的だが、頑張り過ぎる傾向がある。
平坦型 II	凡人	平均的で個性に欠けて面白くない。
平坦型 III	引きこもり	物静かで控えめで引きこもりがち。
18. P 優位型	リーダー	責任感が強く、人に優しく思いやりがあるが、上から眼線。
19. C 優位型	冒険家	気分屋でいつも相手に依存し、スリルや快楽を追求する。

$t_{138}=3.145, p<.01$ ;  $t_{138}=2.983, p<.01$ ;  $t_{138}=2.145, p<.05$ ;  $t_{138}=2.889, p<.01$  が、それ以外の項目において有意な性差は検出されなかった。

林・瀧本 (1991)<sup>18)</sup> が行った調査では、抑うつ尺度21項目の総合得点の平均値が、男子大学生9.47 (SD=6.71)、女子大学生11.83 (SD=7.47)、短大生女子13.38 (SD=7.59) であった。これらの値に比べて、本調査の対象となった大学生のBDI 得点は男女とも高い傾向にあるといえる。

### 自我状態

5つの自我状態とその一般的特徴を表2に、それぞれの自我状態における平均値を表3に示す。各自我状態における性差を調べた結果、NP においてのみ男子学生の方が女子学生よりも有意に高い ( $t_{138}=2.099, p<.05$ ) ことが分かった。5つの自我状態の間の相関を調べた結果 (表4参照)、CP、NP、A、FC の間で有意な正の相関が観察された。また、AC はCP およびFC と有意な負の相関関係にあることも分かった。これは、AC が高くなると、CP およびFC が低くなる傾向にあることを示している。

さらに、調査参加者140名のそれぞれの自我状態をパターン別に分類することを試みた。表5に示すように、一般に自我状態を表す5つの尺度の高低によって19種類のエゴグラム・パターンが抽出されている (芳田・前山, 1999<sup>19)</sup>; 東京大学医学部心療内科 TEG 研究会, 2006<sup>17)</sup>; 柴原・遠藤・石井, 2012<sup>20)</sup> 参照) が、これに従って分類すると、エゴグラム・パターン分布は表6 のようになった。また、男女合計のパターン分布の出現頻度 (%) をグラフにしたものが図1である。図1には比較のため柴原ら (2012)<sup>20)</sup> の調査結果も掲載してあるが、両年ともにAC 優位型がほぼ3割を占めている。

表6. TEGパターン分布 (人数)

TEG パターン	男性 (81名)	女性 (59名)	合計 (140名)
1. CP 優位型	1	5	6
2. NP 優位型	5	0	5
3. A 優位型	2	3	5
4. FC 優位型	1	3	4
5. AC 優位型	18	23	41
6. CP 低位型	5	0	5
7. NP 低位型	5	2	7
8. A 低位型	3	2	5
9. FC 低位型	2	4	6
10. AC 低位型	6	1	7
11. 台形型 I	0	0	0
台形型 II	2	1	3
台形型 III	0	0	0
12. U 型 I	0	1	1
U 型 II	2	0	2
U 型 III	0	0	0
13. N 型 I	3	1	4
N 型 II	0	0	0
N 型 III	3	2	5
14. 逆 N 型 I	1	2	3
逆 N 型 II	0	1	1
逆 N 型 III	0	0	0
15. M 型	3	0	3
16. W 型	1	4	5
17. 平坦型 I	0	1	1
平坦型 II	12	2	14
平坦型 III	0	0	0
18. P 優位型	2	0	2
19. C 優位型	4	1	5

### 抑うつ尺度と自我状態との関係

表7に抑うつ傾向と各自我状態との相関分析の結果を示す。抑うつ傾向はCP およびFC と有意な負の相関関係にあり、AC と有意な正の相関関係にある。

また、5つの自我状態の得点を説明変数、抑うつ傾向得点を目的変数とする強制投入法による重回帰分析を行った結果、自我状態が予測変数として抑うつ傾向に有意に関連し

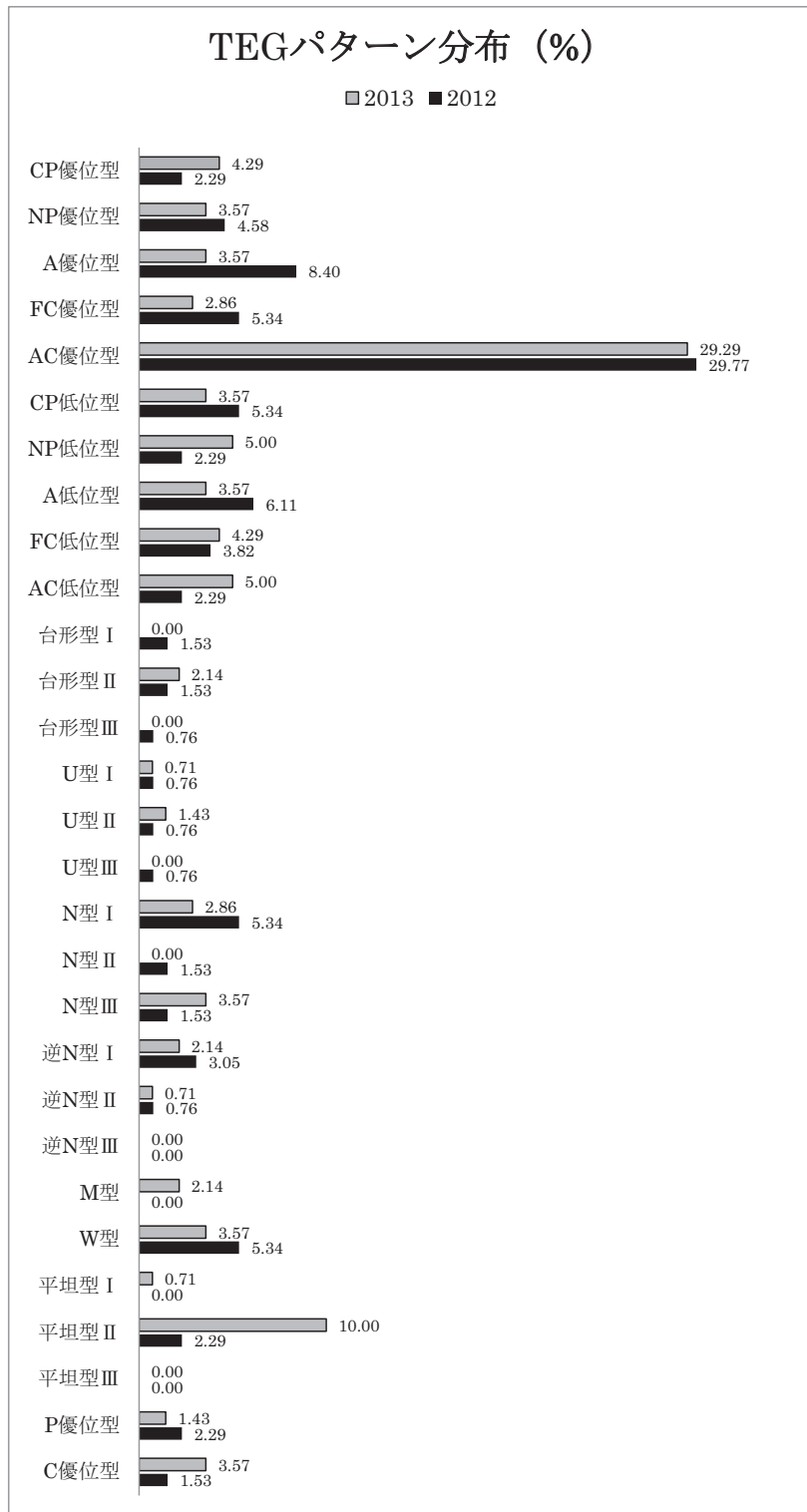


図 1. 2012年および2013年における TEG パターン分布 (%)



表 7. 抑うつ傾向と自我状態との間の相関

	CP	NP	A	FC	AC
抑うつ尺度	-.227**	-.125	-.064	-.436**	.382**

\*\*p <.01 \*p <.05

ていることが分かった ( $R^2=.290$ ,  $F(5,134)=10.946$ ,  $p<.001$ )。特に、AC が正に有意な値を示し ( $\beta=.319$ ,  $t=4.095$ ,  $p<.001$ )、FC が負に有意な傾向を示した ( $\beta=-.434$ ,  $t=-4.927$ ,  $p<.001$ )。つまり、高い AC と低い FC が抑うつ傾向の高さを予測する因子であることが分かった。

## 考察

本研究の目的は、学生の抑うつ傾向を調査し、それと関連する性格特性を明らかにすることであった。そのために、まず抑うつ傾向および自我状態、次いで両者の関係について考察していく。

### 抑うつ傾向

BDI 得点 (抑うつ傾向) の平均値は、男性 (14.09) に比べ女性 (17.59) の方がやや高いものの有意な性差は検出されなかった。しかし、男女とも林・瀧本 (1991)<sup>18)</sup> によるデータと比べ BDI 得点は高い。表 8 の BDI 得点による抑うつ状態の評価によれば、男子で「軽いうつ状態」、女子で「病的なうつ状態との

境界」にあると判定される。また、BDI 得点と人数 (%) との関係からみると、正常範囲内の学生数は男性で 5 割弱、女性で 3 割弱となっており女性の方が少ない。逆に、中程度以上の抑うつ状態の学生は、男性でほぼ 2 割、女性で 4 割弱となっており女性の方が多い。

本研究の調査アンケートは、福祉系大学の 1 年生および 2 年生に対して 4 月から 5 月にかけて行った。新入生にとってこの時期は学修や生活、対人関係といった様々な面で大きな変化を経験する時期であり、この新しい環境にうまく適応できないと抑うつ症状が現れたり無気力に陥ったりすると言われている。しかし、本調査の BDI 得点の平均値は 1 年生男子 9.88 点、女子 15.18 点で、2 年生男子 15.65 点、女子 18.37 点と比べると低い傾向にある。むしろ、2 年生になって単位の履修状況や施設実習に向けての事前学習等に関する不安や悩みなどが影響している可能性もある。この点を検討することは今後の課題である。

表 8. BDI 得点による抑うつ状態の評価および男女別の人数 (%)

得点	抑うつ状態のレベル	性別	
		男性	女性
0～10	正常範囲内	38 (46.9%)	17 (28.8%)
11～16	軽い抑うつ状態 (気分の軽い落ち込み)	13 (16.0%)	12 (20.3%)
17～20	病的な抑うつ状態との境界	14 (17.3%)	8 (13.6%)
21～30	中程度の抑うつ状態	9 (11.1%)	13 (22.0%)
31～40	重度の抑うつ状態	5 (6.2%)	8 (13.6%)
40～	極度の抑うつ状態	2 (2.5%)	1 (1.7%)

## 自我状態

それぞれの自我状態の男女別平均値をみると、相対的に男性はNPとACがやや高く、女性はACが高い傾向にある。また、男女合わせたTEGパターン分布の割合をみると、AC優位型が29.3%、平坦型Ⅱが10%を占めている（図1参照）。AC優位型は「人に気遣いして『No』と言えず、依存的で何も考えない人」、平坦型Ⅱは「あらゆる面で平均的で個性に欠け面白みがない人」という特徴を有している（東京大学医学部心療内科TEG研究会編，2006参照）ことを考えると、あまり好ましい傾向とはいえない。

武藤（1995）<sup>21)</sup>、任・豊田・中井・菅（1997）<sup>22)</sup>によると、対人関係を重視する専門職である看護師の一般的な理想像はNPをピークとしACへと下がっていく「への字型」である。つまり、優しく思いやりのある母親的な自我状態が高く、遠慮し人に合わせる順応的な自我状態が低い傾向にあることが望まれる。本研究の調査対象である福祉系の学生にとっても「への字型」が理想的なパターンであると思われるが、その代表的パターンであるNP優位型は3.6%と少なく、それに比べ望ましくないNP低位型が5%とやや多く、AC優位型となると約30%と多数派になっている。TEGパターン分類によると、相対的にNPが高くACが低いものには、台形型Ⅰ・Ⅱ、M型、およびP優位型があり、その割合はそれぞれ0%、2.1%、2.1%、1.4%となり、合計しても6%に満たない。これらのことを考慮すると、今後の学生の教育に当たって、NPを高めACを低めるように指導していくことが望まれる。

## 抑うつ傾向と自我状態

抑うつ傾向とCPおよびFCとは負の相関関係、ACとは正の相関関係にあるという結

果から、抑うつ傾向の高い人は批判的な親の自我状態と自由な子どもの自我状態が低く、順応した子どもの自我状態が高い傾向にあることが分かった。これらのことから、抑うつ的な人の性格特徴として、優柔不断で責任感に欠け、表情が固く委縮して気力に乏しく、他人に依存し周囲に合わせようとしてすぐ妥協する傾向などを挙げることができる。したがって、桜井・大谷（1994）<sup>23)</sup>が指摘する、抑うつ傾向と「～でなくてははいけない」「～してはならない」という完全主義的な認知のあり方との関連は支持されなかった。

加曽利（2012）<sup>24)</sup>は、重回帰分析の結果から、高いACは抑うつ傾向の高さを予測する因子であると結論づけている。本結果から、高いACのみならず低いFCも同様に抑うつ傾向の高さを予測する因子であることが明らかになった。ACの高い自我状態は、①従順で他人に依存し、②主体性に欠け、他人の言うことに左右されやすく、③他人の評価を気にし、自分を思うように表現できないなどの特徴を有している。また、FCの低い自我状態では、①感情を抑制し、素直に表現できないため物事を楽しむことができず、②消極的で気分が暗く、沈みがちな特徴がみられる。今後、学生に対してFCを高めACを低めるように指導することで抑うつ傾向を高めないようにすることが重要な課題である。

## 参考文献

1. 香川順子：女子大学生を対象とした自己発見支援プログラムの開発と評価－初年次教育の視点から、日本教育工学会論文誌，28（suppl.），233-236，2005
2. 鉄島清毅：大学生のアパシー傾向に関する研究－関連する諸要因の検討、教育心



- 心理学研究, 41, 200-208, 1993
3. 笠原嘉：アパシー・シンдрローム 岩波書店, 2002
4. 広沢俊宗：大学新入生の適応に関する研究（1）－学習面での適応・不適応に関わる諸変数の検討（特集 スポーツマネジメント）, 関西国際大学研究紀要, 8, 121-138, 2007
5. 近畿医療福祉大学編：福祉の未来形を求めて, 言視社, 2012
6. Hysenbegasi, A., Hass, S. L., & Rowland, C. R. : The impact of depression on the academic productivity of university students. Journal of Mental Health Policy and Economics, 8, 145-151, 2005
7. Fabiano, P., Stark, C., & Lindsey, B. J. : The prevalence and correlates of depression among college students. College Student Journal, 43, 999-1014, 2009
8. 堀野緑・森和代：抑うつとソーシャルサポートとの関連に介在する達成動機的主要因素, 教育心理学研究, 39, 308-315, 1991
9. 佐々木司：その習慣を変えれば「うつ」は良くなる, 講談社, 2012
10. 保野孝弘・島田修・宮田洋：大学生における Type A・B 行動特性とうつ状態との関連, 川崎医療福祉学会誌, Vol.5, No.2, 187-190, 1995
11. 佐藤徳・安田朝子・児玉千稲：3因子モデルに基づく、抑うつならびに不安症状の分類－多次元抑うつ不安症状尺度の作, 性格心理学研究, Vol.10, No.1, 15-26, 2001
12. 佐々木栄子・小山善子：うつ病患者への教育・指導に関する基礎的研究－患者・看護者へ一般性自己効力感尺度を用いた質問紙調査を通して, 日本看護研究会雑誌, 第27巻, 第2号, 19-28, 2004
13. Beck, A.T.: Cognitive therapy and the emotional disorder. New York: International Universities Press, 1976
14. 金子一史・本城秀次・高村咲子：自己関係づけと対人恐怖心性・抑うつ・登校拒否傾向との関連, パーソナリティ研究, 第12巻, 第1号, 2-13, 2003
15. 三野善央：日本一役に立つ、うつとストレスの本, メディカ出版, 2010
16. 林潔：Beck の認知療法を基とした学生の抑うつについての処置, 学生相談研究, 9 (2), 97-107, 1988
17. 東京大学医学部心療内科 TEG 研究会：新版 TEG II－解説とエゴグラム・パターン, 金子書房, 2006
18. 林潔・瀧本孝雄：Beck Depression Inventory (1978年版) の検討と Depression と Self-efficacy との関連についての一考察, 白梅学園短期大学紀要, 27, 43-52, 1991
19. 芳田章子・前山直：看護学生の自我状態とストレス反応との関連, 藍野学院紀要, 第13巻, 45-53, 1999
20. 柴原直樹・遠藤正雄・石井恒生：中国人留学生と日本人大学生の自我状態の比較, 近畿医療福祉大学紀要, 第13巻, 2号, 79-86, 2012
21. 武藤眞佐子：エゴグラムからみた看護学生の特徴, 岩手女子看護短期大学紀要, 第3号, 17-32, 1995
22. 任和子・豊田久美子・中井義勝・菅佐和子：エゴグラムからみた看護学生の自我状態の変化, 京都大学医療技術短期大学部紀要－別冊健康人間学, 第9号, 1997
23. 桜井茂男・大谷佳子：完全主義と抑うつ傾向の関係についての研究－Burns による完全主義尺度を用いて, 奈良教育大

学紀要, 第43巻, 第1号 (人文・社会),  
213-223, 1994

24. 加曾利岳美：大学新入生における抑うつ  
傾向と恥および罪悪感との関連. 文京学  
院大学人間学部研究紀要, Vol.13, 101 -  
122, 20